研究ノート

ルーキウス・.アーフラーニウス・エロース
－タラゴーナとナルボンヌの間で－

山　本　晴　樹

既に筆者は、ルーキウス・アーフラーニウス・エロース（Lucius Afranius Eros）[1]を、半公的な皇帝礼拝祭司であるアウグスターレースのナルボンヌでの一例として取り上げたことがあるが[2]、その際この人物がタラゴーナと何らかのつながりをもっている点について、そのもつ意味を明確には意識していなかった。その後、とりわけヒスパーニアの碑文研究が進展するなかで、この人物に関する碑文も読み直しが試みられるようになり、タラゴーナとナルボンヌとのつながりもあらためて問題となってきている[3]。

ここでは、まず当該碑文（CIL XII, 4377）を写真①とともに挙げる。

写真①CIL XII, 4377（cliché Centre Camille-Julien）[4]

《 L·AFRANIVS·CERIALIS·L·
EROS·IiiiI(sic)·AVG·DOMO · TA
RACONE(sic) OSPITALIS A GALLO
GALLINACIO AFRANIA·CERIA
LIS L·PROCILLA VXOR　AFRANIA
L·L·VRANIE · F·ANNORVM · XI · HIC SITA EST 》

＜L(ucius) Afranius Cerialis l(ibertus)
Eros IIIII(Ivir) Aug(ustalis) domo Ta(r)
racone (h)ospitalis a Gallo
gallinacio, Afrania Ceria
lis l(iberta) Procilla uxor, Afrania
L(uci) l(iberta) Vranie f(ilia) annorum XI, hic sita est. ＞

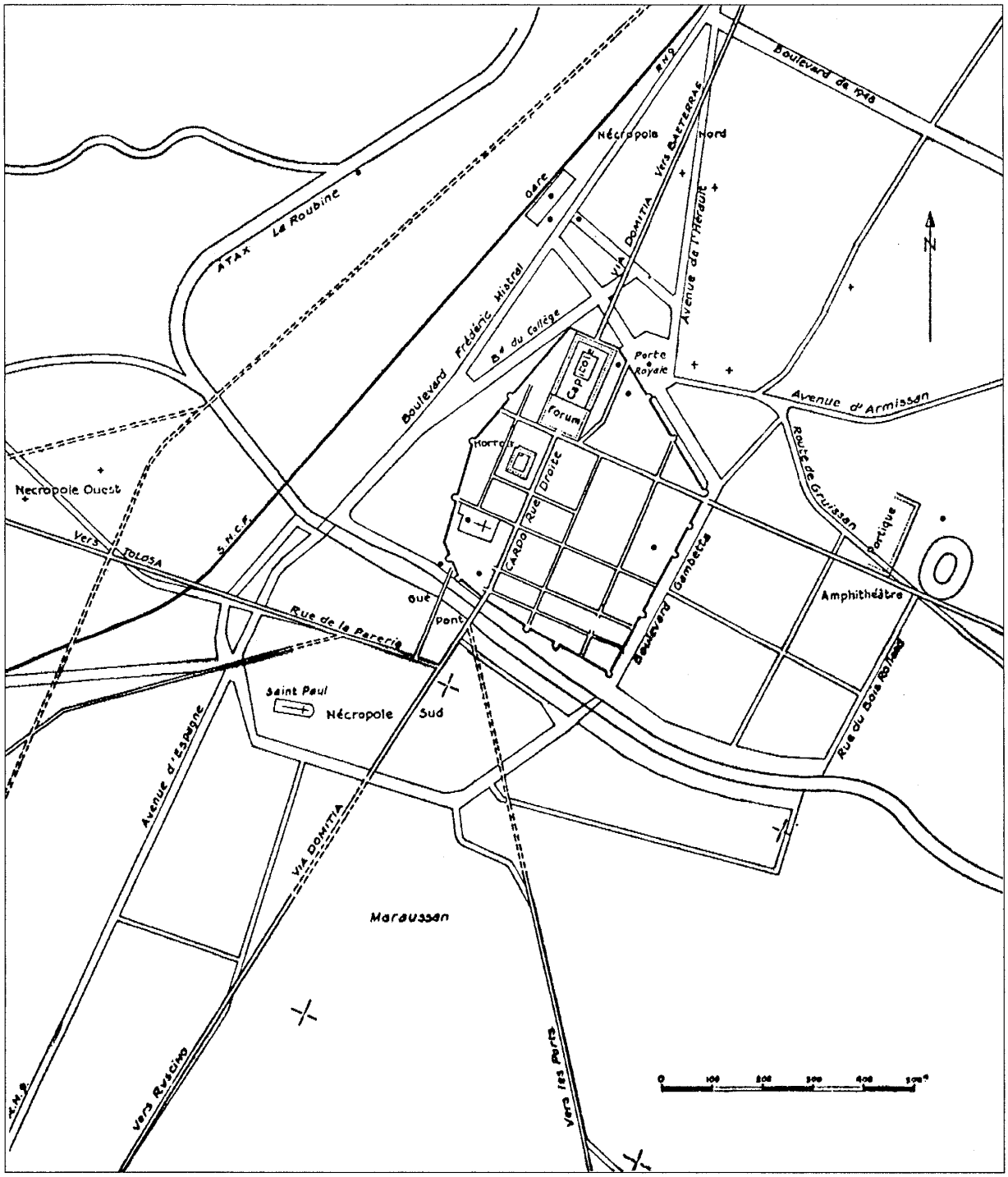
「ケリアーリスの解放奴隷、ルーキウス・アーフラーニウス・エロース、アウグスターレース、タラゴーナ出身、旅館「ガリアの雄鶏」の主人、ケリアーリスの女解放奴隷アーフラーニア・プロキルラ、妻、ルーキウスの女解放奴隷アーフラーニア・ウーラニエー、11歳の娘、彼女はここに眠る。」

Hirschfeld（碑文編纂者）の注記によれば(5)、これは後1世紀の文字による石碑で、ナルボンヌの「ムーア人の塔」(turris Maurorum) の残骸から1637年に発見された。その後、「ムーア人の塔」から引き出され、司教館の庭に運ばれ、今日博物館の中庭に置かれている(6)。「ムーア人の塔」はナルボンヌの市庁舎広場 (Place de l'Hôtel de Ville) に近接したところに建てられていたもので、当該石碑はその取り壊しの際に発見された。この碑文の刻まれた石碑の形状は、縦0,7m、横1.17mで、上掲写真①に明らかなように、かなり損傷をうけている。碑文の内容から、両親が11歳で亡くなった娘のために建てた墓碑である(7)。

以下、碑文に即して述べていくことにしたい。

まず、エロースの正式名称から、彼がケリアーリスの解放奴隷であったことがわかる。この場合、通例のパトローヌスの個人名 (praenomen) ではなく、家名 (cognomen) が使われている。というのも、ケリアーリスが生来の自由人であれば、解放奴隷エロースの正式名称はL.Afranius L(uci) l(ibertus) Eros となる。ところが実際には L. Afranius Cerialis l(ibertus) Eros であった。これは、パトローヌスのケリアーリス自身が解放奴隷であるからである。そのような場合はパトローヌスのpraenomen (Lucius) ではなく、cognomen (Cerialis) が使われるのである(9)。ナルボンヌではこのような事例がいくつかみられる。これに対してタラゴーナではわずか3例である(10)。このことからすれば、パトローヌスの cognomen を使用する慣習はナルボンヌで一般的であるので、エロースはタラゴーナよりもむしろナルボンヌが本拠地であったことになる。

エロースの経歴の筆頭にあらわれているように、アウグスターレースという役職は彼にとってきわめて名誉あるものであった。これに関して、Bonsangueはタラゴーナとのつながりをもつエロースが、その地でもアウグスターレースであったかを問い、その可能性を否定している。その理由として、ナルボンヌで複数の都市のアウグスターレースを歴任した場合(11)、そのことが明記されて



地図①ナルボンヌの都市プラン[8]

いることを挙げている。例えば、ナルボンヌとエクスのアウグスターレースを歴任した以下の事例がそうである[12]。

Quadronius Fidelis (CIL XII, 4414)

VIvir (=sevir) Aug (ustalis) C (olonia) I (ulia) P (aterna) C (laudia) N (arbone) M (artio) et C (olonia) I (ulia) Aquis Sextis[13]

L.Vercius Priscus (CIL XII, 4424)

IiiiiIvir (=sevir) Aug (ustalis) C (olonia) I (ulia) P (aterna) C (laudia) N (arbone) M (artio) et Aquis Sextis

両者はともにナルボンヌとエクスのアウグスターレースを歴任したことになる。従ってタラゴーナの都市名をともなわないエロースは、ナルボンヌでのみアウグスターレースであった可能性が高い。ただ、他地域とのつながりをもつものも、アウグスターレースになりえたことをエロースの例は示している。事実、アウグスターレースは必ずしもナルボンヌの市民である必要はなかった(14)。このようにエロースの出身としてタラゴーナが記されているのであるが、Bonsangueによれば、これはエロース自身というよりもむしろ、彼のパトローヌスであったケリアーリスの出身に関係しているという(15)。タラゴーナとのつながりをここで示すことがなんらかの意味をもったのであろう。

エロースは自己の職業も記している。(h)ospitalis a Gallo gallinacio(旅館「ガリアの雄鶏」の主人)がそれである。ナルボンヌのアウグスターレース関連の碑文で、自己の職業を記す例は他にもみられる(16)。

金細工師 (CIL XII, 4391: aurifex)
回船業者 (CIL XII, 4398;4406: navicularius)
鉄鉱山請負人 (CIL XII, 4398: conductor ferrarum)
呉服商 (CIL XII,4422: vestiarius)

一般に職業には具体的な説明はともなっていないのであるが、エロースの場合、明確に「ガリアの雄鳥」という名称が付けられている。これはこの名前がナルボンヌでは一定の価値をもったことを示していよう。ナルボンヌは属州ナルボネンシスの首都であり、地中海沿岸に位置し、この属州の幹線であるドミティウス街道 (via Domitia) が貫通する都市であった。また、内陸部のトロサ (現トゥールーズ) を通ってブルディガラ (現ボルドー) へ至るルートの出発点でもあった。従ってこの都市に滞在する人々も多く、彼らを受け入れる宿泊施設もそれに応じて繁栄したと思われる。事実、ストラボン (IV,1,12) もニームとの比較の中ではあるが、ナルボンヌに占める商人の多さを以下のように指摘している(17)。

「アレコミスキ族の母市はネマウソス市で、他部族民や交易商人が群れをなして集まっている点ではナルボにはるかに及ばないが、市民の多さではこちらの方が勝っている。」

エロースのパトローヌスである、ルーキウス・アーフラーニウス・ケリアーリスはタラゴーナ出身であるが、イベリア半島では gens Afrania はあまり現れない[18]。そうであるならば、ケリアーリスはタラゴーナでよりも、移住したナルボンヌにおいて名をなしたと思われる。Bonsangueによれば、ナルボンヌにおいて、ケリアーリスは旅館「ガリアの雄鶏」（Gallus gallinacius）の所有者として成功し、ナルボンヌの名士となった。その解放奴隷エロースはパトローヌスから、おそらく彼の死後、その旅館を受け継ぎ、これまた財をなした。その資産によって解放奴隷のなかでも有力者となり、ナルボンヌのアウグスターレースに選ばれたのである。

エロースとともにこの墓碑の奉献者である妻アーフラーニア・プロキルラは夫エロースとともにケリアーリスによって解放され、自由身分を得た。その時既に娘アーフラーニア・ウーラニエーを得ていた。というのも、もし娘が解放後生まれたとすれば、その娘の正式名は、エロースの解放奴隷ではなく、彼の娘 (Afrania L (uci) f (ilia) Uranie)となったであろうからである。Bonsangue は、ウーラニエーが父エロースによって買い戻され、解放されたと推測している[19]。そのような娘であったが、11歳で夭折する。その最愛の娘のために建てられたのがこの墓碑であった。その埋葬の表現として <hic sita est> が使われているが、これは帝政最初期に現れる表現とされており、この墓碑がその時期に立てられたことを示している。

Bonsangueは、ケリアーリスの中に、ローマ化されたイベリア半島出身者の姿をみている。また、ケリアーリスが彼の奴隷であったエロースを伴い、出身地タラゴーナを離れ、ナルボンヌに移住し、その地で名士となったこと、そして彼の解放奴隷エロースがアウグスターレースになったことのなかに、イタリアとの何らかのつながりをもって、イベリア半島で活動してきた人々の子孫が、帝政最初期において、属州間で移動し始めている姿をみている。この動きをBonsangueは「ローマ化の深化」[20]ととらえている。このことは、あるいは別な見方からすれば、属州間における局地的なつながりの形成ともとらえられるであろう。これに関連して、馬場典明氏はアンフォラ銘の精査によって、カタルーニア地方とガリア南部には世紀交代期にひとつの地域的な経済圏が成立したと指摘している[21]。とするならば、ケリアーリスおよびエロースによる「タラゴーナからナルボンヌへ」の「ひと」の移動は、「もの」の流れと連動しているように思われる。

註

(1) CIL XII,4377 = ILS 7476.

(2) 拙稿（1992）「ガリア・ナルボネンシスのアウグストゥス礼拝六人委員（seviri augustales）－ナルボの場合－」『史学論叢』（別府大学史学研究会）第22号19-31頁、特に21-22頁。

(3) 近年、ヒスパーニアのエリートに関するプロソポグラフィックな研究が活発に展開されてきている。筆者が目にした最近の成果として、タラゴーナ、コルドバ、メリダにおける都

市エリートをとりあげた Sabine Panzram, *Stadtbild und Elite: Tarraco, Cordoba und Emerita Augusta zwischen Republik und Spätantike*, Stuttgart, 2002、ローマ期スペインのエリートに関する論文集 Antonio Caballos Rufino et Ségolène Demougin (ed.), *Migrare: La formation des élites dans l'Hispanie romaine*, Bordeaux, 2006がある。本稿は後者の下記論文を参照している。Maria Luisa Bonsangue, Des affaires et des hommes: entre l'Emporion de Narbonne et la Péninsule ibérique (1er siècle a.C.- 1er siècle p.C.),p.15-68, spéc. p.39-43.

(4) *Carte archéologique de la Gaule: Narbonne et le Narbonnais 11/1*, Paris, 2002, p.432, fig.534.

(5) CIL XII, 4377の注記。

(6) Hirschfeld編纂の時点。

(7) 「ムーア人の塔」は古代のナルボンヌの囲壁内に建てられている。従って、この墓碑はかつては囲壁外の墓地（おそらく地図中の Nécrople sud ）にあったが、その後そこから移されたものと思われる。このように、ナルボンヌの石碑の発見場所は必ずしもそれがかつてあった場所を示すとは限らない。

(8) R. Chevalier, Cité et territoire. Solutions romaines aux problèmes de l'organisation de l'espace Problématique 1948-1973, *ANRW II, 1* (1974), Placnhe XLV (62. Plan de Narbonne).

(9) Bonsangue, *op. cit.*, p.39.

(10) Bonsangue, *op. cit.* ,p.39 n.109.

(11) その歴任の形態が、同時的であるか、あるいは継起的であるかは、碑文からは判断しがたい。

(12) Bonssangue（*op. cit.*, p.40 n.112）が挙げている上記以外に、実に4都市（リヨン、ナルボンヌ、オランジュ、フレジュス）のアウグスターレースであった C. Aurelius Parthenius (CIL XII, 3203 = ILS 6984) の例がある。この人物については、拙稿（2002）「あるアウグスターレース－C. Aurelius Parthenius－」『躍動する古代ローマ世界』（田村孝他編）理想社 201-209頁参照。

(13) このように当該都市の正式名称を伴うアウグスターレースと、それを伴わないアウグスターレース（例えばエロースがそうである）との間に、なんらかの違いがあるのかについては、現在のところ明確にしえない。

(14) 例えば、上記のC.アウレーリウス・パルテニウスは、ナルボンヌのアウグスターレースであったが、ニームの名誉都市参事会員であり、その地に記念碑を残している（拙稿（2002）202頁）。アウグスターレースとは異なり、明白に公的な都市皇帝礼拝祭司においても、他都市の市民が就任している事例がある。例えばエクスの市民がナルボンヌのそれである事例（CIL XII, 4363)、あるいはナルボンヌの市民がベジエのそれである事例（CIL XII,4402）である。

拙稿(2005)「元老院属州ナルボネンシスにおける創設期の都市皇帝礼拝祭司をめぐって」『別府大学大学院紀要』第7号27頁、註42（32頁）参照。

(15) Bonsangue, *op. cit.* p.40.

(16) Gayraud, *Narbonne antique*, Paris, 1981, p.370f. 拙稿（1992）29頁。

(17) 飯尾都人訳『ストラボン ギリシア・ローマ世界地誌Ⅰ』龍渓書舎1994年7月、319頁。Cf. A. Dirkzwager, *Strabo über Gallia Narbonensis*, Leiden, 1975, S.87. Dirkzwagerはこの箇所の適訳としてH.L.Jones (*The Geography of Strabo II*, Cambridge Mass.,London, 1923)の以下の英訳を採用している。"(Nemausus, which) although it comes considerably short of Narbo in its throng of foreigners and of merchants, surpasses Narbo in that of citizens."

(18) Bonsangue, *op. cit.*, p.43 n.124.

(19) Bonsangue, *op. cit.*, p.39.

(20) Bonsangueの表現は "un processus de romanisation profond" である。Ditto, *op. cit.*, p.43.

(21) 馬場典明「《M·PORC》銘アムフォーラの生産と流通－属領型葡萄酒アムフォーラの一事例－」『西洋史学論集』30（1992年）29-41頁。

Lucius Afranius Eros (CIL XII, 4377)

sévir augustal, interégional entre Tarragone et Narbonne ?

L. Afranius Eros est sévir augusutal de Narbonne. Il est affranchi par son patron L.Afranius Cerialis. Celui-ci est originaire de Tarragone en Espagne, qui a émigré à Narbonne avec Eros comme aubergiste de l'hôtel "Le Coq Gaullois". Il y a reussi et a devenu notable de Narbonne. Eros, son affranchi, était son héritier de cet hôtel célèbre après la mort de son patron. Eros y a aussi reussi beaucoup. Grace à ça, il est élu sévir augustal de Narbonne. Eros est aussi originaire de Tarragone. Donc Cerialis et Eros sont des hommes interrégionaux entre la Tarragonnaise et la Narbonnaise. On dit qu'un réseau des échanges économiques a été formé parmi ces deux provinces au début de la Principauté. Par conéquent Cerialis et Eros, semble-t-il, sont personnages influencés par la nouvelle dimension des activités économiques dans l'Empire romain .

YAMAMOTO Haruki

Université de Beppu (Japon)